第２回「きょうから音読名人!」

代表者　　三谷　亜也佳　（教育学部 学校教育教員養成課程 ３年）

１．目的と概要

音読は，脳が活性化するとともに，すべての教科の基本となる読解力を身につけるために有効である。そのため，現在香川県下の小・中学校において，音読活動が盛んに行われている。そこで，より多くの子どもたちに音読発表の場を設けることで，音読の楽しさを子どもたちや保護者に体験してもらうとともに，このイベントが親子のコミュニケーションの機会となることを目的としてプロジェクト事業を企画した。

本プロジェクト事業では，小学生による音読発表会，県下の小学校における音読活動の紹介，現職教員による参加型音読教室の３部構成の学生企画イベントを企画・運営・開催する。

２．実施期間（実施日）

平成 20 年 7 月 28 日　から　平成 21 年 1 月 25 日まで

３．成果の内容及びその分析・評価等

●イベント開催に向けての準備

音読発表会に応募者が多数の場合には，時間の都合上，出場者を選定しなければならないため，現職教員対象の研修会「言葉のセミナー」に参加した。このセミナーでは，審査の仕方だけでなく，私たち自身が音読の技術を向上するために，日本語のアクセントや音読の仕方などについて学習することができた。このセミナーに参加したことは音読や日本語についてより教養を深める良い機会となった。

〔「言葉のセミナー」への参加〕

県下の小学校の音読活動の取材では，高松市立二番丁小学校と，高松市立花園小学校に取材依頼をした。取材をするためには，事前の小学校長の許可が必要であり，学生が直接，小学校の先生方と交渉し，撮影して編集したものを先方へ見せることを条件に取材許可を得た。また，取材の対象が児童ということで，本イベントで放映するためには保護者の承諾も必要である。そのため，収録したビデオを保護者に見せて，もし承諾を得られなければその部分を削除することを条件に，編

集を進めていった。

さらに，前回イベント(H20.5)の際に，各小中学校へチラシを配布しても，児童・保護者の手元まで届かないと反省点が出た。そのため，今回は各小学校の管理職に許可を得て，全校児童への配布依頼を行った。配布依頼先は，学生スタッフの母校や学生ボランティア先にお願いをした。小学校に依頼に行くにあたって，事前にどのような依頼の仕方をするかスタッフ会で確認をすることによって，丁寧な言葉遣いとマナーを意識して取り組むことができた。

〔小学校の音読活動取材〕

このような広報活動の結果，音読発表会への応募が36組（低学年16組，中学年12組，高学年8組）あった。このことから，多くの子どもたちが音読に関心があり，機会と場さえあれば，発表してみたいと望んでいることがうかがえる。さらに，小学生だけでなく，兄弟と一緒に幼児の応募も3組あった。また，小さい子ども同伴の保護者向けに託児を用意しており，早くから予約を受けていた。参加申し込み者の中には県外からの応募もあり，「一般の音読発表の場も設けてほしい」という要望も寄せられた。

〔学生スタッフが作成したチラシ〕

本イベントを開催するに当たって，後援申請，講師への出演依頼も私たち学生がすべて行った。これらのことを通して，チラシ仕上がり予定日から逆算し審査期間を見通しての申請書提出や，リハーサルの日程調整など，相手の立場に立って計画的な準備を行うことの難しさを体験することができた。

〔学生スタッフ会の様子〕

このように，イベントの企画・運営を通して，様々な人と関わる時には，相手が気持ちよく動けるような心遣いや言葉かけをすることが大切であることを学ぶことができた。また，一人が動くのではなく，組織で動くためには，学生スタッフ同士の報告・連絡・相談など横のつながりを大切にしなくてはならないことを学んだ。

●イベント当日

〈リハーサル〉

イベント開場時刻前に，音読発表会に参加する子どもたちが入場の仕方や立ち位置，礼をするタイミングなど学生スタッフと一緒にリハーサルを行った。このように，子どもたちがあらかじめ実際に舞台に立ってみるというのは，緊張感や不安を取り除くために欠かせないことであったように思う。また，開演前に会場の人たちと一緒に簡単なゲームを行ったことも効果的であった。

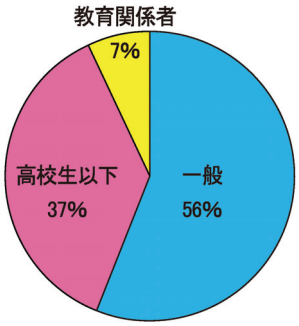
〈音読発表会〉

音読発表会は，4 部構成にして行った。風邪やインフルエンザが流行する 1 月にも関わらず，欠席者がいなかったことは幸いであった。各部 9 組ずつで，計 36 組の発表があった。順番に関しては，低学年や幼児は他の発表者が発表している時間を待つのは，緊張感が高まったり，集中力が欠けてしまったりするかもしれないと考えたため，低学年や幼児がいる組を各部の一番始めに発表するように工夫した。これにより，低学年や幼児も練習の成果を十分に発揮できたであろう。

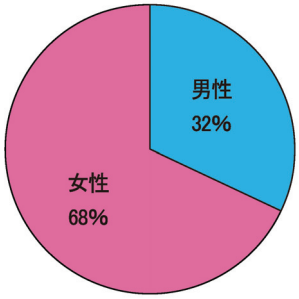
〈アンケート及び来場者の反響〉

本イベントの来場者に対してアンケートを実施した。来場者 150 名のうち，アンケートに協力してくださった方は，81 名であった。

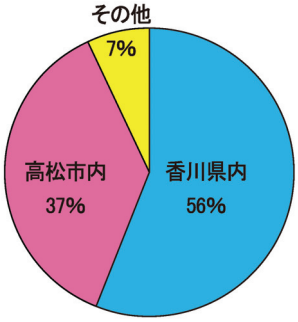
１．アンケート回答者 区分内訳



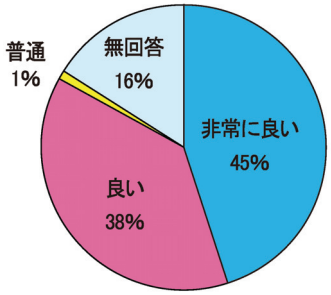
２．アンケート回答者 男女比



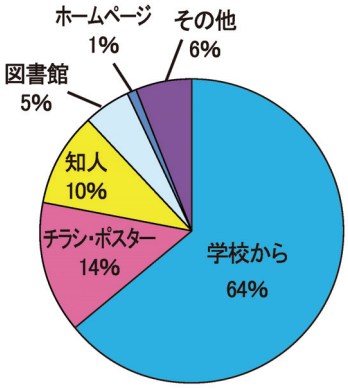
３．どちらからお越しになりましたか。



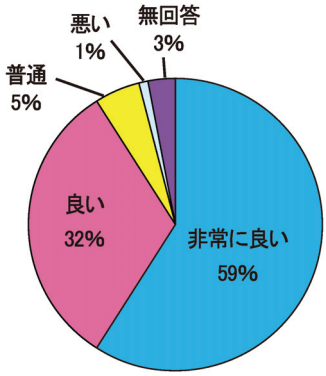
４．本日のイベントはいかがでしたか。



５．このイベントを何でお知りになりましたか。
（複数回答可）



６．学生スタッフの対応はいかがでしたか。



イベント当日は，雪という天候にもかかわらず，香川県からだけでなく，徳島県や愛媛県，岡山県などの県外からも来ていただくことができた。こうして来られた方の中には，「孫の発表会を聞きに来た。」という意見もあり，子どもたちに音読発表の場を設けることで，県外からもわざわざ来てくださったことがありがたかった。そして，子どもたちが頑張って発表する姿を見て，「感動した」「勉強になった」という意見もあり，子どもたちにとって良い経験になるだけでなく，発表を聞く保護者や一般の方にとっても楽しんでもらえた音読発表会になったようである。

音読発表会に出場した子どもたちの感想の中には，「とても楽しかった。」「緊張したけど間違えずに言えて良かった。」「とても広いステージで堂々と音読ができてとてもよかった」などがあり，本イベントの目的でもあった音読の楽しさを感じてもらうことができ，音読を堂々と発表することで自分に対する自信を持つことができたのではないかと考える。

また，音読発表会の本番前に子どもたちと簡単なゲームをしたり，待っている間に談笑したり，励ましたりと，子どもたちの緊張をほぐすために，様々な工夫を行った。こうすることによって，学生スタッフに関する感想の中には，「スタッフの人たちがとてもおもしろくて楽しかった。」「本番の前もいろいろな人が緊張をほぐしてくれたので，とてもいい音読発表会ができた。」「笑顔で優しく接してくれてよかった。」といった感想が多くあった。子どもたちにとって最高の発表ができるようにするために，私たち学生スタッフの言葉かけや表情一つがとても大きな影響を及ぼすことがわかった。

また，学生スタッフは蛍光緑のジャンパーを着て，各係の仕事を分担して行っていた。このジャンパーを着ることにより，スタッフ自身に，自分はスタッフであるという自覚を持たせるだけでなく，来ていただいたお客様に対しても，スタッフを見つけやすく，わからないことを聞く際，非常にわかりやすいという感想を持っていただくことができた。特に，教育学部・経済学部の各門に会場案内係を設けることによって，初めて大学に来る方にとっても大学の位置を示すのにとてもわかりやすいと好評であった。当日は雪が降る中，会場案内係は外で案内をしたのだが，来てくださるお客様のことを第一に考え，行動で示すことによって，相手に気持ちよくなってもらうことの嬉しさや充足感を味わうことができたように思う。

最後に，企画自体に関して述べると，お客様のアンケートの中に「保護者以外の人が参加するための工夫が必要である。」「趣旨がわかりにくい点が結構あった。次回には改正する必要がある。」などのご意見があり，今後イベントを企画していくにあたっての課題点が残された結果となった。また，「リハーサルの時間が朝早いのが大変だった。」という意見もあり，遠方から来る音読発表会の出場者のことを考えずに時間を設定してしまったことは，反省すべき点である。次回行う機会があれば，イベント開始を午前ではなく午後に変更して，遠方からでも余裕をもって来ていただけるようにしたい。しかし，観客からの意見では，「楽しい企画をありがとう。」「自発的に選択し参加できるのでうれしい。」「同じようなイベントがあれば参加したい。」「子どもの体験型のイベントをまたお願いします。」などの感想が多く寄せられ，大変良い反響を得ることができ，次回の開催を期待するものが多かった。今回の反省を生かして，今後も今回企画したような，子どもたちが楽しみながら体験できるイベントを企画して，子どもたちの成長にかかわっていきたいと強く思う。

４．この事業が本学や地域社会等に与えた影響

このプロジェクト事業を実施することにより，子どもたちにより多くの音読発表の場を設けることができると考えている。香川県内では，子どもたちが一生懸命練習している音読を発表する場というものが十分にあるとは言い難い。そのような中で，私たち学生が主体となって，こうしたイベントを行うことは，子どもたちに自信をつけてもらう良い機会になるとともに，香川県における音読活動がさらに盛んに行われるきっかけとなるだろう。

また，香川大学での開催ということで，県外の方を含め地域の方々にとって本学が更に身近に感じられるようになったのではないだろうか。そして，本学の学生にとっても，外部の方の訪問によって，香川大学生という自覚が高まった。

さらに，当日の司会進行は，中学生と一緒に行った。前回イベントに参加した丸亀市立南中学校より「香川大学と一緒に企画をしてみたい」との申し出があった。今回はキャリア支援教育の一環として，申し出のあった中学生にもスタッフとして参加してもらい，一緒に企画･運営を行った。このように，中学生が香川大学生と一緒に活動することによって，キャリア支援教育の体験の場となるとともに「将来香川大学に来たい」という思いを抱いてもらうことができるのではないかと考える。

〔中学生との合同リハーサルの様子〕

５．自分たちの学生生活に与えた影響や効果等

学生スタッフにもイベント後にアンケートを実施した。「この企画に参加してあなたにとってプラスになったことは何ですか。」という問いに対して，「日常生活では考えたことのなかった相手への配慮について考えるいい経験となった。」「子どもたちの安全について考えることができるようになった。」「多面から物事を考えて準備することが大切だということを学んだ。」等このイベントを通して，コミュニケーション能力，計画性，チームワークの大切さや達成感が自分にとってプラスになったと回答している。また，「この経験が今後どのようなことにつながると思いますか。」という問いに対しても，「社会に出た時の対応や様々なことに対しての見通しや計画の立て方につなげたい。」「教員になって学校行事を行う時の準備に生かしたい。」「他の音読活動にも目を向けてみたい。」など，これからの生活や将来の職業につなげようという意欲が出てきている。大学外の人と関わること，知らなかった人と共に活動をすること，チームで計画を立て実行すること，自分が作成したものについて意見をもらうことや実際に動いてみて反省することなど，私たちが日常生活ではなかなか経験することのできないことをイベントを通して経験することで視野が広がり，自分や相手のこと，これからのことを考えるよいきっかけになった。

また，学内だけではなく小学校や様々な施設に出かけて広報をする中で，スタッフ一人一人が「香川大学の顔」という強い自覚を持つことの大切さを学ぶことができた。常に，香川大学生として一般の方々に見られているという意識をもち，一人の大人としての対応を求められて

いるということも実感した。そのため，様々な場面や相手に応じたマナーなど，実際に体験していく中で少しずつではあるが身についてきたように感じる。

６．反省点・今後の抱負（計画）・感想等

〈反省点〉

●イベント開催に向けての準備

私たちが，各小学校の児童へ直接チラシを配布する前に香川県内の小学校にイベントのチラシを 10 部ずつ入れ郵送したところ，「学級数より少ない部数では，実質配布できない。学級数あれば良かった。」という意見があり，イベントの応募に関する問い合わせもいくつかあった。自分が教員として配布する場合に何枚のチラシが必要か，初めて聞く人に理解できるように分かりやすく説明できているかというように，いずれの場合も相手の立場になって考えきれていなかったことが原因であるといえる。

また，学校を通して児童に配布してもらうためには，学校の予定を事前に把握し，それを考慮して活動計画を立て，準備していく必要がある。例えば，出場応募者への出演通知を「音読カップの出場者を本選で確認してから」としていたが，このため終業式に間に合わず児童への出演決定の通知が遅れてしまった。自分たちの都合ではなく，相手側の都合を優先させて行動しなくてはならなかったことを反省している。

●イベント当日

イベント終了後，学生スタッフで反省会を行った。そこでは，各担当ごとに良かった点，改善すべき点について話し合った。その際，観客のアンケートも参考にした。

当日は朝から雪だったため暖房のききが悪く，参加者の方から寒いとの意見があった。また，朝早い時間からのリハーサルに間に合わなかった出場者もおり，リハーサル開始が遅れてしまった。そのため，リハーサルがゆとりをもって行うことができなかった。遠方から来られる方がゆとりをもって集合できる時間ではなかったことや，雪が降るかもしれないと想定していなかったためであった。

この他にも，各係で反省すべきところがあり，自分たちなりにどのようにすればよいか考え準備して臨んだにもかかわらず，予測していなかったことへの対応やもっとこうしたら良かったとの意見がいくつも挙がった。事前に予想される問題をイメージし，その予防策・対応策も考えておく必要がある。

〔イベント後スタッフ反省会の様子〕

〈今後の抱負〉

「またやってほしい」との意見が多かったので，観客の声に応えたいと思う。その際，今回の反省を生かしていきたいと考えている。先述した反省点を総合すると，開催時期と開演時間

を検討する必要があると考える。開催時期については 11 月の下旬に開催することで暖房の問題を改善することができ，開演時間については，午前中にリハーサルを行い，午後から本番にすることで，ゆとりをもってリハーサルを行うことができ，本番に万全の状態で臨むことができると考える。このように，今回の反省点を一つ一つ検討し，具体的にどのようにして改善していくのか考えて，ぜひ次回も開催したい。

7．実施メンバー

代表者　三谷　亜也佳（教育学部３年）

構成員　栗野　恵弥　（教育学部４年）
秦　　早織　（教育学部４年）
鈴木　祐子　（教育学部４年）
山原　真弓　（教育学部４年）
高峰　京子　（教育学部３年）
富田　唯　　（教育学部３年）
綾田　奈生子（教育学部３年）
安西　健太　（教育学部３年）
板野　愛　　（教育学部３年）
井筒　芽衣　（教育学部３年）
忽那　祐佳　（教育学部３年）
高橋　範久　（教育学部３年）
三谷　沙織　（教育学部３年）
村上　由香里（教育学部３年）
松本　由愛　（教育学部３年）
矢野　真奈美（教育学部３年）
山田　日香　（教育学部３年）
弘瀬　志穂　（教育学部３年）
益田　真紀　（教育学部３年）
旅田　郁子　（教育学部３年）
寶田　真里那（教育学部３年）
貝　　京子　（工学部３年）
篠永　有美　（農学部３年）
菰渕　綾　　（経済学部３年）
武田　幸子　（法学部３年）
岡本　真典　（教育学部２年）
尾﨑　愛　　（教育学部２年）
三浦　翔子　（教育学部２年）
久木　麻衣　（教育学部１年）
横山　実紀　（教育学部１年）
和良地　翔平（教育学部１年）

計　３２名

共催：香川県教育文化研究所

後援：香川県教育委員会，高松市教育委員会，香川県 PTA 連絡協議会，高松市 PTA 連絡協議会，朝日新聞高松総局，RSK 山陽放送，RNC 西日本放送，NHK 高松放送局，OHK 岡山放送，KSB 瀬戸内海放送，産経新聞高松支局，山陽新聞社，四国新聞社，TSC テレビせとうち，毎日新聞高松支局，読売新聞大阪本社